報告番号	＊　第　　号

主論文の要旨

論文題目

思春期・青年期にある自閉症スペクトラム障害・注意欠如/多動性障害者の自己 ―自己の変容パターンに注目した発達支援の検討―

氏名　花井文

論文内容の要旨

Ⅰ．緒言

社会性や対人関係に困難をもつ自閉症スペクトラム障害（Autism Spectrum Disorder,以下 ASD）、衝動性のコントロールや実行機能に困難がある注意欠如/多動性障害（Attention Deficit/Hyper-activity Disorder,以下 ADHD）などの発達障害は、生活全般に長期的な影響を与える（アメリカ精神医学学会,2013）。思春期、青年期は急激な身体的成長と性の発達が進み、自我同一性に悩み（岡堂,1986）、戸惑いや混乱、不安を体験しやすい。この時期、同世代の仲間集団内の相互作用の体験は、こころの拠り所となるだけでなく、自分の能力等の現実的な評価や、他者と自己の視点を統合させ、協調性を学び自己中心性から脱却する力を育てるなど、その後の自己の発達にも影響を与える（金,細川,2005）。

しかし、発達障害のある子どもは、仲間関係を築くことに困難をもちやすく（別府,野村,2006）、自己の発達が脅かされやすいと考えられる。他者との関係の中で否定的な自己像をもちやすい傾向（中山,田中,2008）、反抗や失敗などの、症状に起因する困難がすなわち自分である、ととらえる体験など、混乱した自我構造に注目した自己形成への支援が必要であると指摘されている（Krueger & Kendall,2001）。発達

障害者の自己を明らかにし、支援を検討することは、人間の発達過程を長期的に支え、本人の視点を基盤とした看護の検討に寄与すると考えられ、思春期・青年期にある発達障害者の自己を、本人の語りから明らかにすること、得られた結果から、思春期・青年期にある発達障害者の、自己の発達を支える看護支援を検討することを目的として、研究に取り組んだ。

Ⅱ.研究方法

1.研究対象

ASD あるいは ADHD がある13歳から25歳の若者を対象とした。

2.調査内容

ASD あるいは ADHD のある若者の、感情、認識、意向などを含む自己に関する体験について、面接ガイドを用いた半構造化面接を行った。

3. 調査手順

紹介を受けた若者に、研究目的、方法、内容、いぎ、倫理的配慮を書面及び口頭で説明し、承諾が得られた場合に、同意書を取り交わし、面接を実施した。

4. 分析方法承諾を得て IC 録音したデータから面接内容の逐語録を作成した。自己に関連する考え、感情、意向について語られた文脈を、コード化し、類似性、相違性を検討し、カテゴリー化を行った。サブカテゴリーを用いて、対象者ごとに経過を記述し、カテゴリーの類似性、共通性、相違性、構造を探索した後に、自己の変容パターンを検討した。

5. 倫理的配慮

平成 28 年 6 月名古屋大学生命倫理審査委員会の承認を受けて実施した(承認番号 16-102)。

Ⅲ. 研究結果

7 医療施設と1つの子どもと親の会から、計 17 名の紹介を得た。帰納的分析を行った結果、3概念、【自己への関心と実感】、【意向と自己の変容】、【実感されない、注目されない自己】が生成された。

11事例が、【自己への関心と実感】のカテゴリー、《安心できる場では自分でいられる》《感覚や特徴、自分を実感する》の両方を体験した後で、【意向と自己の変容】のカテゴリー、《周りの人に受け入れられる自分でありたい》《自分が望む自分でいられる方法を創っていく》、を体験していた。《周りの人に受け入れられる自分でありたい》と《自分が望む自分でいられる方法を創っていく》体験の順によって、複数のパターンに分けられた。

Ⅳ．考察

全例が、関心をもって自己をみつめ実感し、同級生や家族との関りを通して、様々な感情を抱く体験をもっていた。しかし、言葉で他者に伝える、という行為を起こさないまま、考え続ける場合も少なからず見受けられた。他者への不信や失望、他者との関わりそのものに対する緊張や不安が根強く、それらの影響が考えられた。

また、対象者の多くは、独自の感覚や特徴を自覚しており、その内容はネガティブなものが多くあったが、人との関りを通して、他者の視点や多様な感じ方に触れ、自身の特徴や自己をとらえ直す体験をしていた。日常生活そのものが恐怖や不安と共にある彼らにとって、安心できる人との相互作用は、安寧や安定を実感し、他者を頼る体験や、自分についての様々な実感を得る重要な体験であり、自己の育ちに必須であると考えられた。

自分がこうありたいという意向は、周りの人に受け入れられるように自分の関わりをシュミレーションし、考え行動するなど、人間関係を保つ方向性と矛盾しない形で体験されていた。つまり、空気を読むことや集団生活に苦労するなど、他者との調和的な関わりに困難をもちながらも、他者の存在を組み込んで、現実的な他者との交流を志向し、自己を変容させていくことが明らかになった。一方で、様々な認識や行動の主体としての自己そのものが、確かなものと感じられず、自身の感情や意向を実感しない体験があり、特徴的であると考えられた。様々な情報が押し寄せ、あふれるように感じられる生得的な感覚特性によって、感覚が分化、抽象化されずに生々しい感覚のまま、処理されずにある（小林,2017）と考えられた。相互作用を通して他者の感じ方に触れ、感情を共有するなど、《自己への関心と実感》の体験を積み重ね、確かな実在として自己を感じられるよう、支えることが重要である。

Ⅴ．結語

自己を明らかにするために、思春期・青年期にあるASD/ADHDのある人を対象に面接調査を行った。3概念【自己への関心と実感】【意向と自己の変容】【実感されない、注目されない自己】が生成された。自己を実感する豊かな体験をもつ一方で、自己を実感したり、注目したりしにくい特徴があることが示唆された。

自己の変容には共通するパターンがあり、安心感と自分の感覚や特徴の実感が自己の発達の基盤となると考えられた。安心感をもてる他者との相互作用を通して、自己の感情や実感を体験する過程を、長期的に支えることが自己の育ちを支える上で重要であると考えられた。